

日本の救急・災害医療体制を紹介

PREX
NOW

No. 119

November
2002財団法人 太平洋人材交流センター
Pacific Resource Exchange Center

contents

page 1~2 セミナー

日本の救急・災害医療体制を紹介

page 3 セミナー

マレーシアにてPREX同窓会セミナーと
ニーズ調査を実施

page 4 特集【各国研修員からのメッセージ】

マレーシア

カムリ・アフアンディさん

page 5 PREX役員、常任幹事のひとこと

noblesse oblige “ノブレス・オブリージェ”

PREX常任幹事 宗田 奎二

page 6 PREXだより

事務局ニュース

11月実施の研修

コラム



PREXでは今年度初めて「救急大災害医療セミナー」に取り組んだ。

これまで、企業経営や産業関連行政に関わる研修を多く実施してきたPREXだが、関西地域が有する数多くの専門的な機関や施設、そして専門家のノウハウを生かした事業の実施という観点から、今年度から受託することとなった。

研修の概要

期間

2002年8月27日～9月13日

18日間

対象者

キューバ、ガーナ、メキシコ、
モンゴル、ペルー、トルコ、
ウガンダ、ヴェネズエラ
各国において救急医療や
災害緊急医療に携わる医師
や関連行政部署責任者 9名
日程（次項の表参照）



研修参加者と甲斐運営委員会委員長
（右から2番目）

大災害時の国際医療協力の発展を目指して

現在、世界各国で地震や台風などの自然災害、人災といった、多くの災害が頻発しているが、それらは誰にも予想できるものではなく、発生した時にいかに適切な救命活動や救急医療サービスが提供できる体制が整っているか、という点が重要となっている。

そこでこの研修では、参加各国における救急医療・大災害医療の改善と、大災害時の国際医療協力の発展を目的として、日本における救急医療体制の現状や整備過程の紹介、そして同時に、研修員自身による参加各国の救急・大災害医療の事情紹介が行われた。

研修員各国の現状報告とディスカッション

研修最終日には、研修員から各国の救急医療・災害緊急医療の現状について報告する「ミニシンポジウム」を実施した。他国の研修員からの報告や、日本の専門家からの最新の報告に対して、質疑応答やディスカッションを行うなど、貴重な情報入手・情報交換の場となったに違いない。

帰国研修員のリストの拡充によるネットワークの強化

今年度から、PREXのホームページに当研修の過去の参加者（帰国研修員）リストを掲載し、帰国研修員間でのネットワークの再構築を図ることとなった。

今後、日本の専門家（運営委員会やその他研修にご協力いただいた方々や機関）のリストへの参加、当該分野関連機関のホームページへのリンクなどの拡充策を検討し、救急医療・災害緊急医療における、世界的なネットワーク強化に貢献できるよう取り組む必要があると思われる。

以上のように、様々な意味でPREXにとっては初めての取組みとなった研修であったが、これまでのPREXの経験の幅をより広げ、新たな扉を開くステップとなったと実感している。

そして何より、世界が直面している問題に「救命」という最前線で取り組んでおられる、日本の先生方や研修員の皆さんとの出会いは私自身にとっても大きな意味を持つものであった。

国際交流部 課長代理 森光 恵美子

運営委員会 委員長の一言
大阪府立千里救命救急センター
副所長 甲斐 達朗氏

この研修セミナーは、1988年に第16回日本救急医学会(会長:元大阪府立千里救命救急センター所長 太田宗夫)が大阪で開催されたおり、第1回アジア太平洋大災害医療会議を同時に開催したことに由来する。すなわち、国際協力事業団(JICA)にお願いし学会期間中に集団研修セミナーを開催し、アジア太平洋地域から災害医療に関心の有る医師10名を日本に招待したことから始まった。以降、毎年約10名の災害医療・救急医療に関心の有る医師が約3週間の研修に参加している。

初期は、インドネシア、フィリピン、タイ、マレーシア、シリア、パキスタン、パプアニューギニアなどアジア地域を中心とする参加者が多数を占めていたが、近年は、ボリビア、チリ、メキシコ、パナマ、コスタリカなどの中南米や、ウガンダ、ガーナ、セネガルなどアフリカからの参加者が増加している。多くの参加

国は環太平洋地震帯に位置し、地震・火山・台風(ハリケーン・サイクロン)など日本と共通の災害を持ち、また、日本が1960年代に経験したモータリゼーションに伴う交通事故の急増を遅れて経験しており、救急医療体制の構築が急務な開発途上国である。

研修内容は、消防の救急搬送体制、救急隊員・救命士の教育制度や内容、救急医療機関を1次～3次に分担した日本独自の救急医療体制、阪神淡路大震災以降に構築された日本の災害医療体制の理解、病院の災害対応や災害計画の理解を目的として、代表的な医療機関、消防機関、災害対応機関の見学と講義を中心に行っている。国内で救急災害関係の国際学会があれば、学会発表を、また開催されない年には、研修員を中心とした国際シンポジウムを開催しカントリーレポートを報告してもらっている。医療事情、経済事情、救急医療体制などは、参加国で異なり、日本の体制をそのまま導入することは困難な場合が多いが、研修員は、帰国後夫々の国で日本の体制を参考にし救急医療体制や災害医療体制の構築の中心的な役



大阪府立千里救命救急センターを見学

割を担って活躍している。また、帰国後も研修員同士が連絡を取り合い、情報交換を行っている。シリアでは、厚生省の救急災害担当局長から主要都市の大病院の救急部長は、すべて本セミナーの参加者で占められている。

PREXの協力で本年度よりセミナーのホームページの立ち上げと、研修員約140名のメーリングリストの構築を始めた。完成すれば災害救急医療の人的ネットワークが構築され、日頃の意見交換や災害時の詳細な情報交換が可能となり、セミナーの大きい成果の一つとなると思われる。

< ホームページ >

<http://www.prex-hrd.or.jp/index-e.html>

運営委員会とは... 当研修では今年度PREXで受託する以前から、救急医療分野の専門の先生方で構成された「運営委員会」のご協力のもと、研修が実施されてきた。今年度は特にPREXにとって初めての分野の研修だったこともあり、運営委員会の皆様方に研修カリキュラム策定段階から多くのご意見や情報を頂戴し、同時に講師・訪問先へのご紹介・交渉、そして実際のご講義・研修員視察受け入れなど全面的なご協力のもと実施することができた。

研修日程		
月/日	研修内容	講師・見学先
8/27	プログラムオリエンテーション	JICA 大阪国際センター
8/28	コースオリエンテーション 講義:「日本の緊急医療体制と災害医療体制」	大阪府立千里救命救急センター
8/29	講義/見学:「中毒情報提供活動の実際・薬物情報管理」 見学	(財)日本中毒情報センター大阪110番 大阪府立千里救命救急センター
8/30	見学	市立豊中病院、大阪市立総合医療センター
8/31	見学	大阪市中心中央急病診療所
9/2	講義:「自衛隊による救急救助活動」	陸上自衛隊中部方面隊
9/3	講義:「救急医学教育」	大阪大学医学部附属病院 高度救命救急センター
9/4	講義:「国際緊急援助隊について」 講義:「2001年インド大地震における国際緊急援助隊の活動」	国際緊急援助隊事務局 NPO法人 災害人道医療支援会
9/5	講義:「日本赤十字の災害救急医療出動体制」 見学	日本赤十字社 国立病院東京災害医療センター
9/6	見学	東京消防庁消防学校
9/7	見学:防災訓練参加	大阪府防災室
9/9	講義:「阪神大震災で取られた病院の体制」 見学	神戸大学医学部附属病院 神戸市消防局
9/10	講義/見学	人と防災未来センター
9/11	個別研修(シンポジウム準備)	
9/12	ミニシンポジウム	
9/13	評価会、閉講式、フェアウェルパーティー	

運営委員
(順不同・敬称略)
大阪府立千里救命救急センター 甲斐 達朗 副所長
兵庫県立西宮病院 鶴飼 卓 病院長
大阪市立総合医療センター 鍛冶 有登 救命救急センター部長
神戸大学災害・救急医学講座 石井 昇 教授
大阪大学大学院人間科学研究科 中村 安秀 教授
昭和大学横浜市北部病院 杉本 勝彦 救命センター長
日本医科大学救急医学教室 二宮 宣文 講師

マレーシアにてPREX同窓会セミナーとニーズ調査を実施

7月21日から27日の1週間、マレーシア・クアラルンプールを訪問し、セミナーとニーズ調査を行った。PREX同窓会や現地カウンターパートと組んで、PREX独自の基金を使っの初のセミナーである。セミナーには、PREXマレーシア同窓会会員50名が参加した。

セミナー開催

現地カウンターパートと組んで、PREX独自の研修を企画しようとしていた時、日本の新聞では、アセアンに進出している日系企業が、中国に工場を移転し始めたというニュースが流れていた。投資環境や賃金などを考えての行動らしい。マレーシアに引き止めておくには、またより一層の工

場進出を促進するにはどうしたらいいのだろう。日本企業の考え方や見方を知りたいという現地のニーズに応える形で、今回のメインテーマは「マレーシア企業の国際競争力を高めるにはどうしたらいいのか」と決まった。日本からは滋賀大学 小田野純丸教授にご出張頂いた。また、現地では、JETROクアラルンプール事務所 青嶋潤一海外投資アドバイザー、松下電子部品、P&Z Plastic Industry にご協力を頂いた。小田野先生からは、日本経済の抱える問題点とそれに対応した企業の動きを、青嶋アドバイザーからはマレーシアにおける日系企業の動きを、企業訪問では、経営者の生の声を聞くことができた。研修参加者からもマレーシア経済や現地企業の動きについて発表され、マレーシアの優位点

をどこに見出すのか、議論が白熱した。

ニーズ調査

今回の目的の一つ目は、国際協力事業団(JICA)から受託して実施している「マレーシア経営幹部セミナー」の研修テーマに関するニーズ調査である。本研修では人材育成とITをテーマに掲げているが、実際マレーシアが進めているIT化の中心であるスーパーコリドー計画はどうなっているのだろうか。研修員を通じて聞いていた話と、実際に自分の目で見るのとでは全然違う。マレーシアでは国民への普及が進んでいることに驚いた。自分で確かめたことをうまく今後のカリキュラム作成に活かしたい。また、もう一つの目的は海外研修(遠隔研修)に関するニーズである。テーマとしては輸出促進・企業経営など様々な意見があった。テレビ会議システムなど遠隔研修のメリットを活かしながら、マレーシアでの実施可能性をこれから詰めていきたい。

今回の出張に際して、マレーシアの状況を丁寧に説明して下さった方々にお礼を申し上げたい。また、研修員との討議に時間を割いて頂いた講師の方々にもお礼を申し上げたい。マレーシアについて多少なりとも知識は増えた。ご好意を無駄にせず、今後の研修に十二分に役立てたい。

国際交流部 主任 三浦 佳子



マレーシア松下電子部品(株)企業訪問。「日本企業から見たビジネスパートナーとしてのアセアン」をテーマに講義をいただいた。



セミナー開催に協力いただいたマレーシア商工会議所の皆さん。セミナーでは「マレーシアと日本のより良いビジネス関係について」をテーマに基調講演、パネルディスカッション「マレーシア企業の国際市場における課題」、企業訪問を行った。

マレーシア ホームビジット



「一度我が家に遊びにいらっしやい」という元研修員からのご招待を受けて、夜遅かったにもかかわらず訪問させてもらった。宿泊先から電車を乗り継いで30分足らず、

静かな住宅街に着いた。出迎えてくれたのは、2人の子供。まだ小学生と幼稚園児である。どこのひとだろうと興味津々、でもはにかんで近寄ってこない。「座って待っていて」と通された応接間は、ヨーロッパ調の家具できれいに統一されている。お茶を入れてくれたのはインドネシア人のメイド。共働きの彼女に代わって、家事・子守を行っているようだ。「掃除を頼んでもうまくないし…。助かっているのはアイロンがけかな」と、研修中とは打って変わって、すっかり主婦の会話と化した。メイドなど日本では考えられないが、この国では普通らしい。エージェン

トがあり、頼めば斡旋してくれる。最初の数ヶ月分の給与は丸々そのエージェンに入り、その後やっとメイド本人に渡る。シンガポールやフィリピンを訪問した時も同じ話があったが、メイドが家にいるという話は何度聞いても驚く。この際とばかり、ちょっと家の中を案内してもらった。1階は応接間・台所・メイドの部屋、2階には寝室が3部屋あった。私の家よりずっと広い! 普段の生活の様子が窺えたホームビジットであった。子供たち、歓迎有難う。次回は学校の違いを教えてね。

国際交流部 主任 三浦 佳子



マレーシア
カムリ・アフアンディさん

マレーシア計画・資源管理省 主席事務補佐官

2001年度「マレーシア経営幹部セミナー」に参加

マレーシアの教育の現状

マレーシア政府は2020年までに先進国入りのビジョンを打ち出しており、人材育成にも力を入れている。近年では、私立大学や民間の教育機関が増設され、数多くの学生が早い段階から実務訓練の科目に取組み、科学や数学など先進国にとって実務的に必要な課程を専攻している。また、政府及びその下部機構、民間企業によって技能研修機関が多く設立されており、なかには日本、ドイツ、オーストラリア、英国などとの合弁事業で経営されているものもある。

未就職の卒業生に対しては、労働力が不足している政府機関で働く場を与えている。これは、政府の機能を理解すると同時に社会での経験を積むことができるし、民間と政府機関間の交渉能力を身に付けるためのよい訓練となるだろう。その他、政府は国民の多くが教育の機会を得られるように政策をとっている。しかし、まず必要なのは、政府によって提供されている教育プログラムに参加する人々の意識と意欲であると実感する。

日本でのセミナーに参加して

日本人の母国で日本人に接するのは初めての経験であったため、このセミナーは極めて興味深いものであった。私は日本人の先進性について何回も耳にしてきたので、あらゆる日本人は我々より先優れていると思っていたが、ここへ来てみると、すべての日本人が我々より先進んでいる訳ではないことが判った。すべての日本人が常に顧客中心主義というわけでもない。訪問した幾つかの政府機関でもそうしたことを実感した。

研修プログラムは、我々がこれまで経験したものより綿密なもので、特にオリエンテーション講義「日本文化、政治及び人々の紹介」は、日本について知る良い機会であった。ただ、各地方への訪問についてはアレンジによっては移動時間が無駄であったと思う。

また、日本での発展を目のあたりにした。高層ビルディング、関西国際空港、ラッシュ・アワー、昼食休憩時間にしなければならない日本人の昼食の取り方、日本の気候、そして忘れてならないのは桜の花。桜は大変すばらしかった。また、日本と日本人についてさらに多くを学ぶことができた。規律、礼儀正しさ、他人を助けようとする意欲、清潔さ、そして最も興味深かったのは、私が会ったほとんど全部の日本人はスリムだったことである。

今回のセミナーでは、日本の行政府がどのように運営されているか、いかに国民を支援しているかを知ることができた。しかし、その進歩にも拘らず、私は日本人がグローバル化については保守的であり、そのアプローチについては躊躇があるように思えた。日本人はその経験と技術的なノウハウを外部の人と共有するのに依然として抵抗があり、その伝統を固執する意志が強固であるようだ。このことが日本企業の世界における進展が遅々として進まない要素の一つかもしれない。



noblesse oblige

“ノブレス・オブリージェ”

PREX常任幹事 宗田 奎二
株式会社 竹中工務店 常務取締役

《能力あるものは、それにふさわしいふるまいをする義務がある。》

一流と目されている企業の不祥事が相次いで報道されている。

バブル期のリーダー達は拝金主義の下、財テクに走って金儲けイコール経営という短絡思想で、企業倫理を喪失していった。法に抵触さえしなければ何でもありという風潮が、やがてモラルの腐敗を進めてゆく。いつの間にか、自分たちを守るためには犯罪への抑止力すら麻痺させてしまった。企業が起こす現下の同時多発的な一連の不祥事は、こういう所に位置づけることが出来ると考えられる。

わがもの顔でまたがっていたあぶくが弾け、谷底に落下した我々は、やっと自分達の傷だらけの姿を眺め、恥ずかしさのあまり立ち上がる意欲すら失いかけている。

私達は戦後営々50年をかけて「メイド・イン・ジャパン」を世界のブランドに作り上げた。欧米の誇りであった基幹産業の多くを斜陽に追いやり、国際関係をギクシャクさせている。パワー全開の日本の製造業は、より強い国際競争力を求めて海外シフトを強化し、ついでにリーダーシップやモラルさえも放り出したかに見える。その結果、昨今のマスコミを賑わせることになった。まさに繁栄に続く“おごり”が招いた結果であろう。

昨年9月11日、世界を震撼させた事件の舞台となったニューヨークのWTCビル。現代のアメリカを象徴していた高さ410米に達する

この摩天楼はミル・ヤマサキという日系二世の設計である。貧しい移民の家庭に生まれた彼は、苦学と血のにじむ努力の末に、この建築の設計者に抜擢された。更に当時の話題をさらったのは、基幹の鉄骨がUSやベツレヘムと競い合っ、日本から運ばれたことであった。時あたかも日本製品が世界市場に躍り出ようとする時期であった。私の大先輩である建築家の小川正(故人)がセントレイスにヤマサキを訪ねたのは1952年の春であった。未だ戦後を引きずっていた当時の日本では、海外渡航は自由ではなかった。後年出版されたヤマサキの作品集に小川が巻頭言を飾っている。「JETはまだなかった…」で始まる名文で、米国での見聞の一つ一つが新鮮であり驚きの連続であったと綴られている。その頃から一貫して「資源のない日本」は欧米に学ぶことで精一杯の努力を重ねた。それが実を結び、そのうち経済大国と持てはやされ、やがて“おごり”の罠にはまり込んでゆく。

もしここで我々は再び世界の中で何らかのリーダーたらんと欲すれば、自らの行動に倫理規範を持ち備え、真の意味で次代のリーダーにふさわしい人材を育成する以外に方法がないのではなからうか。

《能力あるものは、それにふさわしいふるまいをする義務がある》

いま、“noblesse oblige”が問われるゆえんである。

(文中敬称略)

事務局
ニュース

大阪経済記者クラブとの懇談会を開催

9月18日12:00～13:00、RPEX会議室においてPREX井上会長(ダイキン工業株式会社顧問)と大阪経済記者クラブ記者との懇談会を開催。8社8名の記者が参加した。懇談会では、PREXの事務所移転、ベトナム、モンゴル、マレーシアへのニーズ調査の報告などを行った。

自治体懇談会を開催

9月27日15:00～19:00、PREX会議室においてPREXに出捐いただいている6地方自治体関連部門の7名に参加いただき、PREXの活動状況の報告、各地方自治体の国際交流活動の現況報告と意見交換を行った。PREXの事業目的である、開発途上国人材育成支援事業ならびに関西の国際的人材交流促進に関する連携の可能性等についても意見を交換した。

C O U N T R Y R E P O R T

「海外貿易事情フォーラム」を開催

日時 11/7 10:00～17:00
会場 毎日新聞オーバルホール 研修会議室501
内容 「日本市場マーケティングセミナー」研修参加者による各国の特産品の対日輸出ならびに各国投資環境の説明
パネリスト アルゼンチン、ボリビア、エルサルバドル、タジキスタン、トンガ、パヌアツの対日輸出振興に携わる行政官、経済団体職員 9名
司会・コメンテーター
JMコンサルティング 代表 松永仁一氏

10・11月実施の研修

中央アジアでニーズ調査

日時 10/15～25
内容 日本センター開設に伴う中央アジアにおける新たな研修、専門家派遣などのニーズ調査、PREX同窓生、現地企業などと面談
出張地 ウズベキスタン共和国 タシケント、カザフスタン共和国 アルマトイ
出張者 事務局次長・国際交流部長 津曲一徳、課長代理 森光恵美子

中国・広西省で「中小企業診断セミナー」を実施

日時 10/28～11/1
開催地 中国・広西省壮族自治区南寧市
現地カウンターパート 広西省生産力促進センター
参加者 中国の中小企業支援に携わる行政官・機関の職員 110名予定
内容 中小企業診断理論、生産管理、新製品開発、情報、企業診断実習など
出張者 国際交流部 担当部長 尾上暉隆、主任 酒井明子

「メキシコ中小企業振興政策コース」を実施

日時 11/5～11/22
参加者 南部地方州政府の中小企業政策担当者 5名
内容 日本の地域振興政策と中小企業政策

「モンゴル中小企業経営研修」を実施

日時 11/5～12/6
参加者 中小企業経営者 8名
内容 労務管理、資金調達、物流と情報、新規事業開拓

C O L U M N

「モンゴル恋唄」

事務局次長・国際交流部長 津曲一徳

何処までも果てし無く続く大草原、牛、羊等の牧畜を追い馬上疾駆する遊牧の民、幻の淡水魚イトウ、夜は身体全体をスッポリと包み込む満天の星、源義経・シングスカーン説もあるほど日本人の心根に沁み込みかかつて司馬遼太郎が、開高健が、椎名誠がその筆力で素晴らしさを描き出している国、モンゴル共和国に遂に訪れた。

本年11月に実施予定の「モンゴル中小企業経営研修」の事前調査と現地PREX同窓会フォローアップを兼ねて7月21日から7月29日のスケジュールだった。例年7月上旬のナーダムが終わると直ぐ秋、グット寒さが増しセーターが、郊外に行く時はコートも必要との情報でたった1週間の滞在なのに大型のスーツケースを満杯にしての出張だった。ウランバートル国際空港へ着陸すべく飛行機が降下をはじめ窓から景色が見え始めた。一面赤茶けた荒野、荒野、荒野、緑の草原など何処にも見当たらない。降り立つと物凄い暑さである。今年は異常天候とかで結局滞在中連日34～36度の猛暑、この為草も殆ど枯れて茶色に変色。元々モンゴルは火山地帯で噴火した溶岩が固まった岩盤地層で極めて背の低い生命力の強いハーブ系の草との事。唯一の都市ウランバートル(人口80万人)の街中で殆ど車での移動でも革靴が真っ白になる砂埃である。昨年マクロ経済研修で来日したモンゴル首相経済顧問アディヤ氏がウランバートルでの毎朝の日課は靴磨きからと話してくれたのを実感。緯度が高いので何時までたっても陽が沈まず夜の10時過ぎに夕焼け日没となる、おまけに滞在中ずっと満月。結局満天の星空は一度も満喫出来ずじまい。ダレハン(人口8万人)にあるモンゴル唯一の鉄工所を訪問。ウランバートルから北へ240km冷房の無い4駆で約4時間。最初のイメージとは大分異なるが草原が連なりあちこちで遊牧民が羊の毛を刈っているのが散見される。日本の5倍の国土に人口240万人、牛、馬、羊、山羊、ラクダ等牧畜はその10倍強、冬になればすべてが凍りつきオオカミが徘徊するワイルドな自然。わずか1週間程度の訪問で満足するにはモンゴルは余りに広大で奥深く是非また訪れたいとの思いを強くした。



PREXモンゴル同窓生と筆者津曲(前列左から2番目)

編集・発行

財団法人 太平洋人材交流センター
専務理事 三田 昌孝

大阪市北区中之島6-2-27 中之島センタービル24階
〒530-6691 (中之島センタービル内郵便局私書箱60号)

TEL 06-6441-2650
FAX 06-6441-2640

ホームページ: <http://www.prex-hrd.or.jp>
電子メールアドレス: prex@prex-hrd.or.jp